季刊

直江の津

◉直江津経済文化研究会◉

秋号

2005

9,10,11月

景観◉

文学紀行

巻頭エッセイ◉このまちのこと

良寛さんのように

◉ ひろば ◉

皇后さまにお酌をした
昭和天皇の侍医

【カメラの眼】

コッペルが引っぱるくびきのお宝

季刊 直江の津 第19号 秋号
2005—9・10・11

目　　次

■巻頭エッセイ・このまちのこと
良寛さんのように　伊倉 潔　3

■景観
文学紀行　4

■ひろば
皇后さまにお酌をした昭和天皇の侍医　村山浩一　22

■カメラの眼　20

■読書びと
写真集 雪国はなったらし風土記　無明舎出版刊　28

■読者
住んでいる街を知る喜び　27

■くびきの郷土食　26

■東西海陸　29

■歴史の風景　30

表紙筆文字は町名改正の願いの筆跡（明治11年「福永家文書」）より。
「直江の津」とは中世の物語に登場する直江津のことである。



松代駅前に野外展示されている
草間弥生の作品

♣巻頭エッセイ
伊倉潔さんのこと

1947年、直江津市（上越市）遊光寺に生れる。
直江津高校卒。
上京して大学卒業後、金融機関をふり出しに建築会社を経て、精密機器製造販売会社のオーナーとなり、3年前に会社を売却する。
現在、地球一周の船旅の体験と、自らの来し方を一冊にまとめつつある。

良寛さんのように

伊倉　潔

「最後はここで死にたいからだよ」

三六年ぶりに会った友の「何で帰ってきたんだ」という問いかけに対する私の答えである。

彼はずっとこの地で暮らしてきた。冬の厳しさには辟易している。

今年もまた、雪かきで腰を痛めてしまったと言う。

私は、高校卒業以来三十数年を、ずっと東京で暮らしてきた。そして、三年前、上越市田園に引っ越してきた。私も妻も上越の生まれ。田園の地は、ふたりの在所のちょうど中間に位置している。

雪のない所にずっと住んでみて、分かったことがある。春を待つ沸き立つような喜びは、雪国に住む人のみに与えられている。冬から春、夏、そして秋からまた冬へと、繰り返される季節と、その折々の命の躍動感、これも雪の恵みかもしれない。

私は団魂の世代である。「会社人間」として走り続け、そしてゴールした。

会社は毒々しい生き物であった。合併、買収、分社と、私はその間を生き抜いてきた。時に行き詰まり、もがき、苦しむ折、良寛さんを知った。漢詩と和歌、そのいずれもが、私に時を忘れさせてくれた。そして、いつかは良寛さんのように生きたいと憧れた。

良寛さんは、生まれ故郷に帰ってきて、老い、そして病を得て死んでいった。修行した備前、円通寺は、雪もない穏やかな瀬戸の海の寺。かの地には彼の失意、落魄を知る者とてなく、心を許す朋輩も何人かはいただろうに。

物事は異なる角度から見ることができれば、いくつもの貌を見せてくれる。そして、見えてきたいくつもの面貌を等しく受け入れていく、というのが良寛さんの生き方であると私は理解している。

自分次第で、まわりは変わり、自分も変えることができるのである。

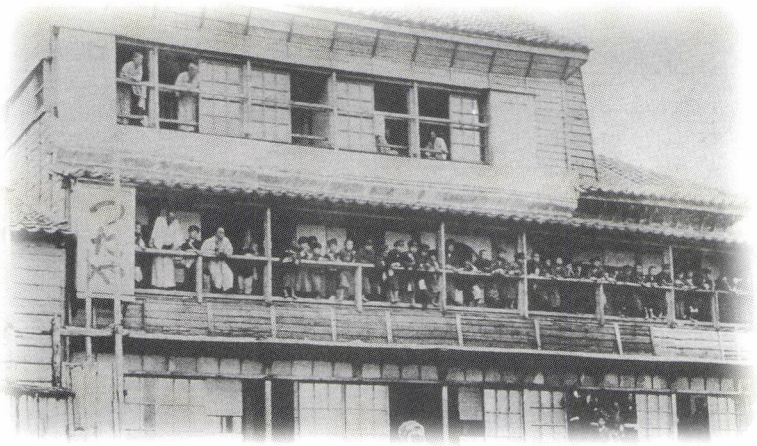
私も、異国東京で十分働いてきた。それは日常の作務、そして行でもあった。これからは、そこでつかみ得たものを実践する形で、いま一度、故郷の自然の中で生き直してみたい。

かつてを知る人々は、もはや競り合う相手ではない。厳しい自然も、克服すべき対象ではない。共に生かさせてもらおう。

景観

文学紀行

旅の途中で、
あるいは何かを求めて、
また任務を帯びて…。
さまざまな思いで、
このまちの駅に降りた
人達の目に映った
「このまち」の風景は
どんなものだった
のだろうか。

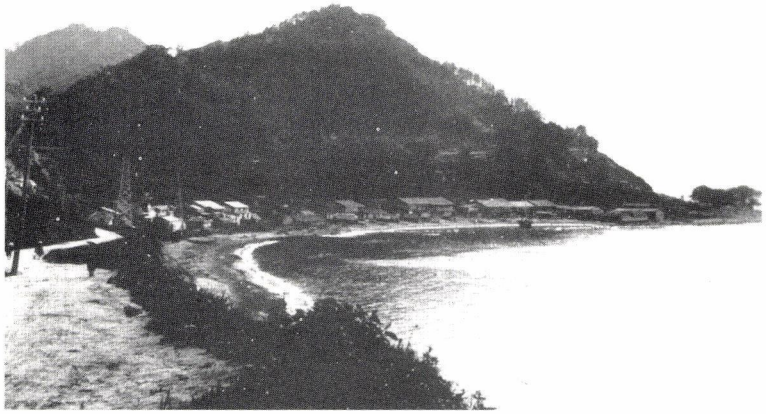


信州の修学旅行生が鈴なりの「つたや」旅館



昭和 30 年代の高田本町通り

北陸本線は明治二九年、米原・福井間で開業（三二年富山まで開通）。明治四四年、富山東線として直江津・名立間が開業し、大正元年十月糸魚川まで開通、大正二年四月、糸魚川・青海間の開業で直江津から米原まで全通した。





上／美しい眺めの郷津湾。
下／松林のなかが前崎館で、手前のあたりが郷津駅になり、後にフィッシングセンターに変わる。晴れていれば、ローエルもこの眺めを車上から見ることができた。

三人の外国人

「能登」へ向かうローエル

明治二二年五月七日、雨がしとしと降る直江津駅に降りた米国人パーシバル・ローエルは、その印象を次のように書いている。

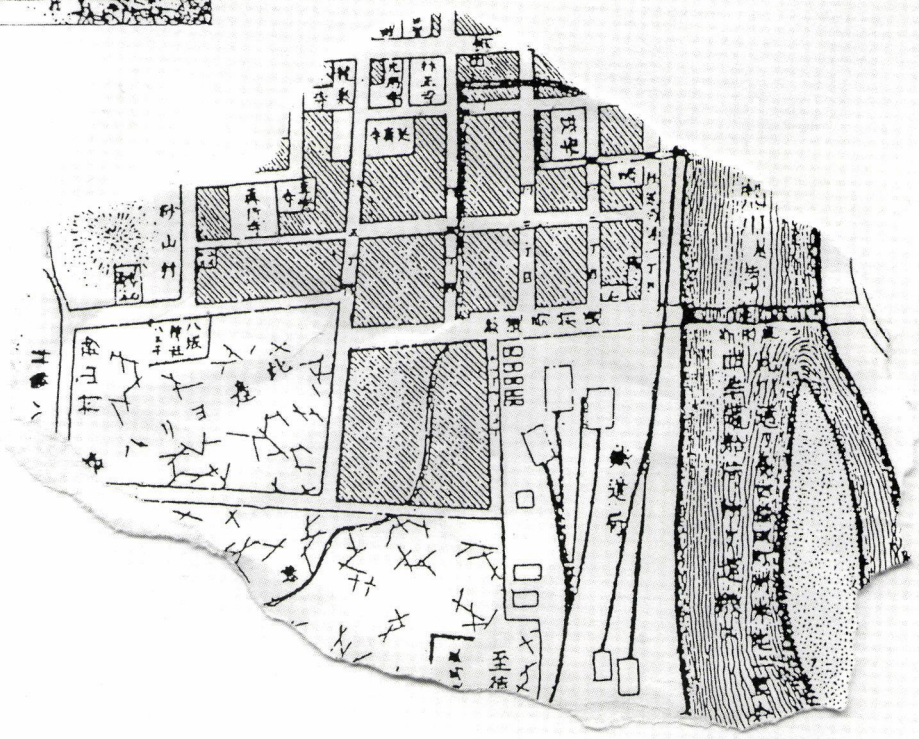
――この町は海に沿って漁師小屋が紐のように立ち並んでいるだけの、うら寂しい所だ。

パーシバル・ローエル

一八五五年　米国ボストン生。
一八九四年　アリゾナ州フラグスタッフにローエル天文台創設。火星観測の結果から高等生物生息の可能性を唱える。海王星の外周に惑星Xの存在を予知。死後ローエル天文台によって冥王星を確認。
一八八三年　日本語修得のため私費で初来日（直後、在日米公使館より朝鮮国米国使節派遣団秘書官に任命される）。以来、四度来日。
一八八九年　能登半島を旅行。「NOTO」を米国で出版。
森有礼暗殺を採りあげた「ある改革者の宿命」を米誌に発表。『極東のこころ』がラフカディォ・ハーンの来日のきっかけになるなど、多くのレポート・著書があり、明治期の優れた日本研究家の一人。
講演では「劣悪なる欧米人になるなかれ、優秀なる日本人たれ」と強調している。
石川県穴水町は「ローエル顕彰会」を設立、「ローエル祭」が行われている。

NOTO―能登・人に知られぬ日本の辺境
パーシバル・ローエル著　宮崎正明訳
十月社（現在入手不可）





「直江津及郷津湾之図附五智細見」（明治19年発行・部分）
明治以降の直江津の最も古い地図と思われる。何度も複製を重ねたため不鮮明だが、駅の位置がよくわかる。四角の枠に紐のようなものが付いているのがホームと線路。その右が関川で直江津橋が架かり、麓病院前の通りが「鉄道局通」と書かれている。上は駅の様子を版画にしたもので、地図中に挿入されている。

駅前には互いに向かい合った数軒の休憩所が並んでおり、少し許りほっとした気分になる。漁師小屋は趣はあるがうらさびれており、休憩所はうらさびれてはいるが、趣をただよわしてしているとでも言えようか。しかし、このような一種の矛盾がかえって、独自の雰囲気をたたえているとも考えられよう。——

彼は、どしゃぶりになった雨の中を人力車に乗り込み、「能登」の旅へと立っていった。

ローエルが降り立った駅は、現在の位置ではない。明治十九年に直江津橋付近に開設された駅舎で、駅前にはまだ何もなく、ローエルが見たような淋しい風景だった。

ウエストンが見た景色

ローエルの旅は高崎・長野に宿泊する二泊三日であったが、それから五年の後の明治二七年七月十八日、上野から十二時間の旅で、その日のうちに直江津駅に立った人がいる。登山家ウォルター・ウエストンである。

ウエストンの一行は、糸魚川からアルプスを縦走するため、当日は駅前の古川屋に一泊している。翌朝、海岸で漁船に曳航される大きな艀に乗り込み、沖合い八百メートルに投錨する糸魚川行きの蒸気船に向かった。

——海岸にはたくさんの行商人が、粟で作った高く評価されている粟飴という菓子を売っていた。これは六キロほど離れた高田の名物となっている。茶屋や直江津の人々の別荘がそこここに点在している絵の







土用の丑の日に海に入ると風邪を引かないといわれ、遠くから訪れる人で大変賑わった。写真の砂丘の上の町並みの中に、左上の「加嶋楼」の写真のような料亭や別荘が郷津湾まで点々とあった。
河口の改修が進むまでは、荷客とも艀で沖に待つ船に乗り込んだ。葉山嘉樹の『海に生くる人々』も、船員たちが沖に停泊する船上から「直江津遊郭」に想いを馳せる。



ような絶壁が、広く拡がった砂地の海岸から険しくそびえている。その海岸には海水浴の人々がずいぶんたくさん遊んでいた。

ウエストンが船上から見た直江津海岸の眺めである。

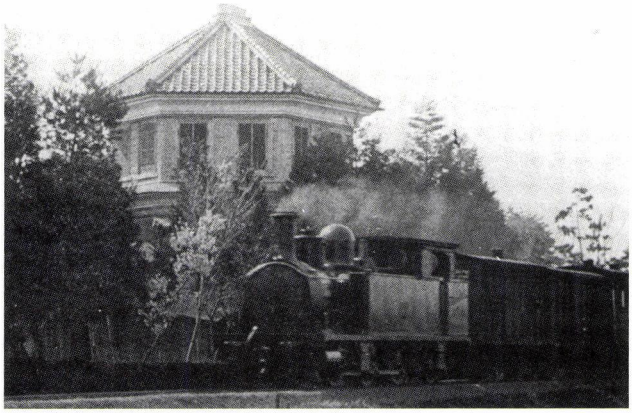
一行は「名立崩れ」を船上から眺め、これから登る大蓮華を望みながら三時間の船旅の後、糸魚川に上陸してアルプスに向かった。

ウォルター・ウエストン

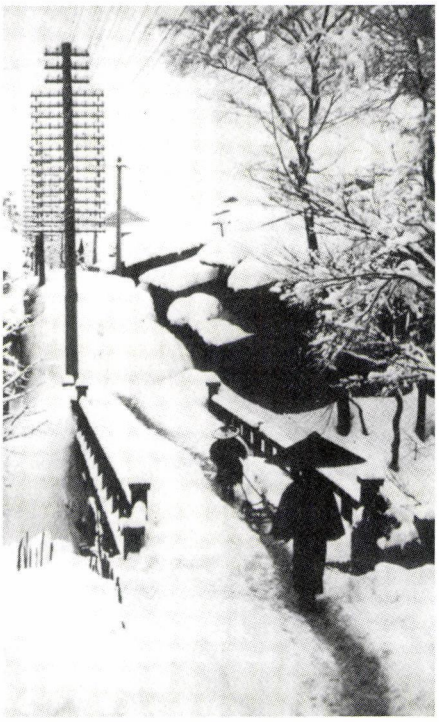
一八六一年　イギリス生。
一八八八年　宣教師として来日。以降一九一五年まで三度にわたり来日。
登山家として精力的に日本国内の山々に登り、その著書で日本の山の紹介だけではなく、山村の風俗などを好意的に紹介している。
「日本アルプス」の名前は、在日欧米人向けの『日本案内記』に「ジャパニーズアルプス」と紹介したことによる。上高地のウエストンのレリーフの前で、毎年「ウエストン祭」が行われている。

日本アルプス―登山と探検
ウォルター・ウェストン著　岡村精一訳
平凡社ライブラリー









上／高田駅は十三師団の設置に合わせて明治41年に改装された。レルヒは冬のこの駅に立った。
左上／高陽館は別院大門通りにあり、写真のように信越線が脇を走っていた。
左／レルヒを驚かせた冬の高級乗り物「人力ソリ」と雪に埋もれる別院大門通。

レルヒの眼

高田に「日本スキー発祥の地」という名誉をもたらした、テオドール・フォン・レルヒ少佐は、日露戦争に勝利した日本陸軍研究のため、オーストリア軍から派遣され、明治三二年十二月来日した。

高田五十八連隊に配属されたレルヒは、一月五日午後六時、雪の高田駅に降り立った。まず、彼を驚かせたのは、ソリの上に黒塗りの箱を付けた乗り物である。出迎えの人に、これに乗るようにすすめられたレルヒは、

テオドール・フォン・レルヒ

一八六九年　オーストリア＝ハンガリー帝国（現・スロバキア）生。
一八九一年　ウイーン・テレジア士官学校卒業。
一九一〇年　日露戦争勝利の日本陸軍研究のため、少佐として来日。
一九一一年　一月一日高田歩兵五十八連隊に配属。十二日日本初のスキー技術指導をする。
一九一二年　九月二九日離日。

――かん念して私は長い足を折り曲げて、私自身をそりの中へ押し込んだ。――黒い箱は波のようなうねりのある雪道で、揺れるの揺れないの、危うく転覆しそうになる――。

そのようにして本町通を走り、人の高さもある雪壁の狭い辻を走って、歓迎会場であり、また滞在中の宿舎にもなる仲町の料亭紅葉館（高陽館）別館に着いた。

レルヒは軍人らしく、高田の城下町としての歴史や町の構造をすばやく観察し、この〈大名都市高田〉は〈サムライ時代〉の建造物はもはや何一つ残っていなかったが、古い時代



金谷山でのレルヒ少佐と少佐を感動させた冬の寺町通り。右下の本誓寺参道の杉並木は、昭和37年の台風で倒壊した。





明治日本の思い出
―日本スキーの父の手記―

テオドール・フォン・レルヒ著　中野理訳　中外書房（現在入手不可）

「明治日本の思い出」は、日本滞在中の単なる記録ではなく、レルヒの日本に対する親愛の眼で、当時の風俗や人情が細かく観察されている。翻訳者の中野理は知命堂病院に勤務中に日本スキー発達史を研究し、神戸市民病院長退職後、六年の歳月をかけて翻訳した。

金谷山周辺で毎年二月にレルヒ祭が行われている。

からの多くのものがよく保護され、町の外観も、また世襲の市民の気持ちも保守的である。と高田の印象を好意的に書いている。

彼が見たこのまちで、最も美しく映ったのは寺町の佇まいである。

北から南にかけて二キロメートルにおよぶ寺地がつづき、数百年の老杉の下に仏教の寺々が列をなして並んでいる。私はこの古い寺町にいると、何ともいえぬ荘厳さに打たれる。私はスキーを履いて、この日本の仙境を通って音もなく滑ってゆく。冬の陽がその斜光を杉の枝を通して投ずるときには、赤い塗料は炎と燃え、芸術的彫刻は暗い背景からくっきりと浮かび出る。まことその価値万金に値する。

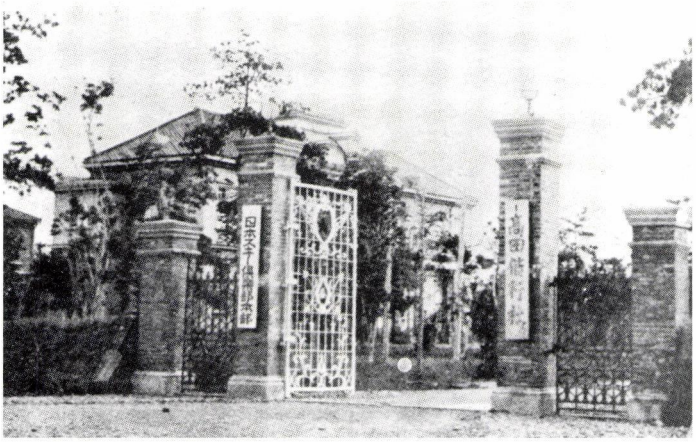
夏には、この巨木は涼しい陰を提供する。朝と夕、僧たちが読経に参向するとき、鐘はじょうじょうたる神秘なひびきを伝える。

私の家はこの寺町のそばにあった、だから二、三歩歩けば、この日本のパラダイスに達することができた。

そしてレルヒは、

高田は茨姫[注]を眠りから救い出し、日本国内に再びその名を挙げた。それをここに付け加えておこう。高田は日本スキーの揺籃の地となり、日本の冬季スポーツマンに周知の名となったことである。

と、手記の一ページに記している。





明治44年、越信スキークラブが結成され、翌年には日本スキー倶楽部が発足し、写真の偕行社のレンガの門柱(現在も残る)に看板が掲げられた。レルヒの送別会もこの偕行社で行われている。金谷山では、今もスキー授業や一本杖の伝承が行われている。



二人の歌人と作家

晶子の想い

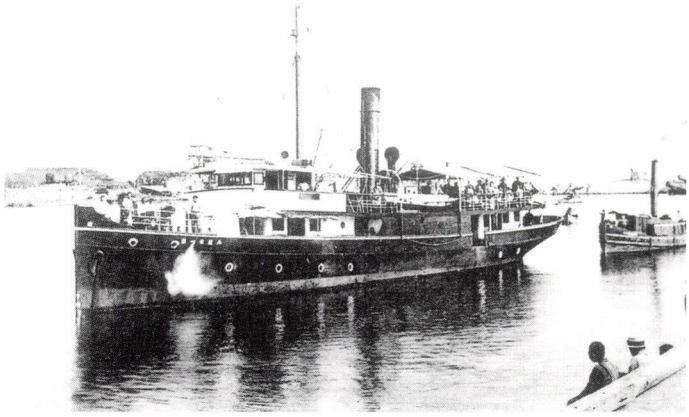
与謝野晶子は夫鉄幹とともに、二度にわたり赤倉温泉を訪れて香嶽楼に泊まっている。大正十年の旅では、

直江津を人買い船の出でぬとて
　ふためきて追ふ山の雲かな(草の夢)
佐渡が島海も御空のものとなり
　やがて山みな黒雲となる(草の夢)

と、宿から望む遥か日本海に浮かぶ佐渡への

注　茨姫「眠りの森の美女」　グリム童話集





直江津駅は明治31年に写真のような現在の位置に移転し、新しい駅前通が生まれて現在に至っている。思いで深い山小屋風の駅舎は昭和15年に生まれた。
佐渡との定期航路は、直江津・澤根間に明治15年に始まったが、廃絶などの紆余曲折があった。大正9年に河口の改修が完成し、与謝野夫妻は、沖待ちする船まで艀で行くことなく、河口に接岸する第一佐渡丸に乗船している。

想いを詠っている。そして十三年八月、二度目の旅で、ようやく直江津から佐渡へ渡り「越佐遊草」（後に『心の遠景』所収）と題して五十首を「明星」に発表した。

落日が枕にしたる横雲の
　なまめかしけれ直江津の海

赤倉に迎へし朝の日なりしが
　今見おくるは直江津の磯

与謝野晶子

明治一一年、大阪堺の老舗菓子店に生まれる。店番のかたわら古典文学、詩歌に親しみ、「明星」に投稿、与謝野鉄幹と出会い、上京して結婚。
歌集『みだれ髪』を発表し、「明星」の代表的歌人となる。また「源氏物語」の現代語訳を手がけ「与謝野源氏」として今もファンが多い。
「君死にたもうなかれ」を「明星」に発表、初の女性文芸誌「青鞜」に〈山の動きたる日〉を発表するなど、女性解放運動のさきがけとしても大きな足跡を残している。昭和十七年没。
与謝野晶子歌集　岩波文庫など

新町通りは江戸時代以来のメインストリート。右手に見える木造の洋館が、芙美子の見た芝居小屋「大正館」。下の「いかや」の写真は、林芙美子が泊まった当時の姿を留めている。







北の海名立の崎のむらさきを
船はばかりて一方に寄る

傷心を癒す芙美子

古い時刻表をめくってみた。どっか遠い旅に出たいものだと思う。真実のない東京にみきりをつけて、山か海かの自然な息を吸いに出たいものなり、私が青い時間表の地図からひろった土地は、日本海に面した直江津という小港だった。

ああ海と港の旅情、こんな処へ行ってみたいと思う。これだけでも、傷ついた私を慰めてくれるに違いない。

と、林芙美子は『放浪記』の直江津への旅に出る。

晶子が直江津を訪れたと同じ年、しかし明るい夏の陽射しとは打って変わった晩秋の灯ともしごろ、駅に降りた芙美子が目の当たりにしたものは、

嵐もよいの湫々とした潮風が吹いていて、あんなにあこがれて来た私の港の夢はこっぱみじんに叩き壊されてしまった。

しかたなく、芙美子は「水色に塗った板造りの西洋建ての旅館」いかや旅館に泊まり、翌日、曇り空のまちを歩いてみた。

街ゆく人達は、家々の深いひさしの下を歩いている。芝居小屋の前を過ぎると長い木橋があった。海なのだろうか、河なのだろうか、水の色がとても青すぎる。——木橋の上は荷車や人の跫音でやかましく鳴っている。静かに流れていく鳩の死んだのを

林芙美子

明治三七年(一九〇四)生。行商を営む親と各地を歩いたが、青春時代を過ごした尾道で、その文才を発揮、尾道高等女学校に進む。

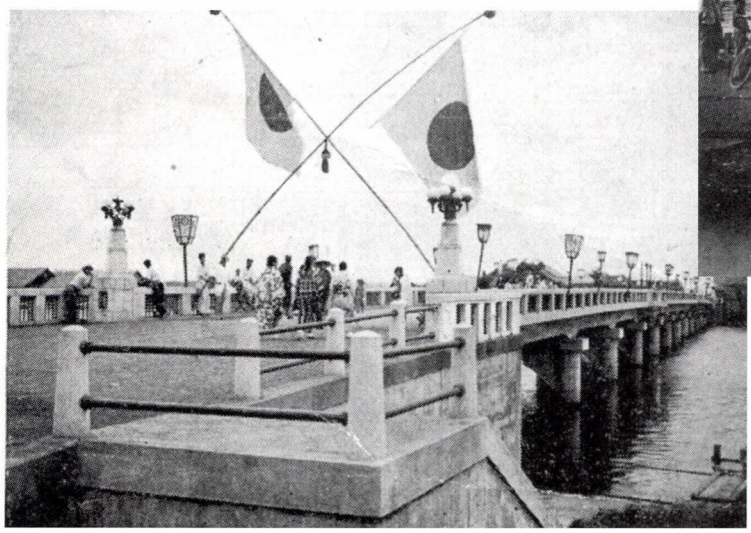
『放浪記』がベストセラーになる。昭和十六年上京。『浮雲』『めし』などを発表。『晩菊』で女流文学者賞受賞。

昭和二六年没。

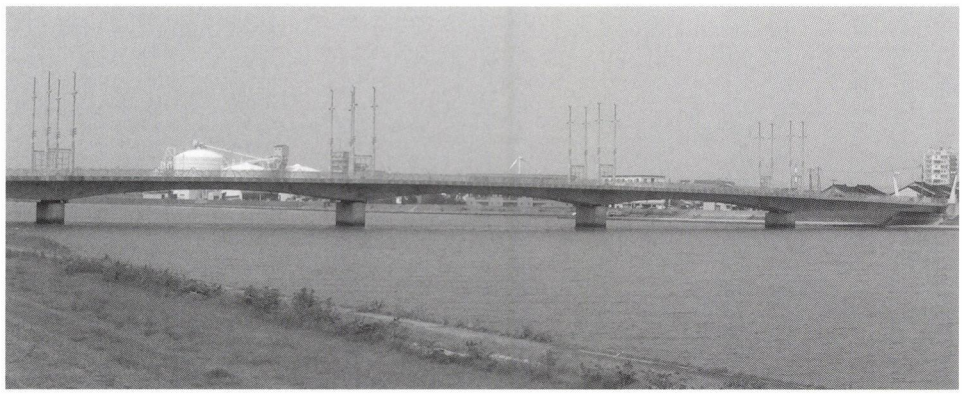
東京新宿の居宅跡は「林芙美子記念館」として公開されている。

放浪記　新潮文庫など





芙美子が立った「木橋」の架かる荒川には、還御する祇園祭の神輿を迎えに行く舟が見える。昭和９年にコンクリート橋に変わった荒川橋も祇園祭の飾り付けがしてある。河川改修により川幅が倍にもなり、再び橋も架け替えられ、なぜか京都の祇園祭のような装飾が施された。



見ていると、幸福だとか、不幸だとか、もう、あんなになってしまえば、空の空だ。と、引き返し、「継続団子」を買い、駅の待合所で食べているうちに死の旅を思いとどまって、東京へと帰っていく。

吉野秀雄が歩いた街

日本が泥沼の戦争へと突き進む昭和十六年の晩秋、吉野秀雄は、芙美子もたたずんだ荒川橋で、

荒川の橋に立てれば冬近き
　海のむなしさに対ふほかなし

冬の海のさわだつ波に荒川の
　濁りは太くおし流れたり

と詠み、そして街をさまよい、

たのめなき冬の日ざしよ直江津の
　耶蘇会堂は檐傾ぎける

浅葱暖簾のかげに爪弾く昼の三味
　ここは直江の津なる浜通り

この浜の砂さへ暗く時化のあとを
　ただちに冬に入るぞすべなき

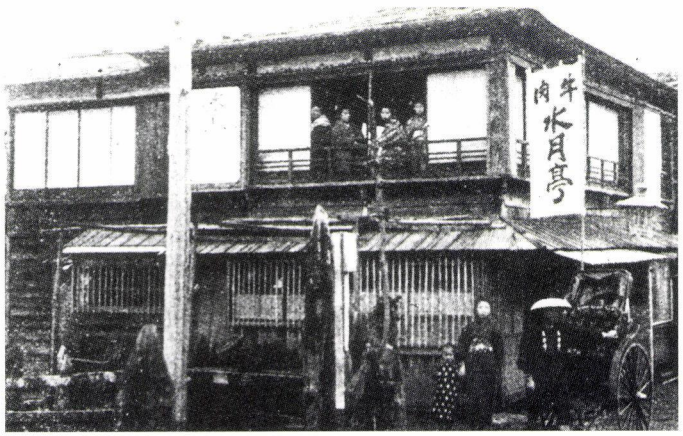
と詠み、この旅の歌を「直江津」と題して『早梅集』に収めている。

木の橋は鉄筋に変わり、もちろん芝居小屋

はない。板造りの洋館も近代的なホテルに変わった。しかし、二人の歌人と一人の作家が見た、この海辺のまちの〈季節の風景〉は、今も変わらない。



吉野秀雄がさまよった荒川橋界隈にあった料理屋。東京亭も水月亭も明治以来のモダンな料理屋であった。かつて荒川町周辺には、明治以降いくつかのキリスト教会や集会所があった。しかし軒の傾いだ耶蘇教会がどこにあったかは、今となってはわからない。



吉野秀雄

明治三五年群馬県に生まれる。両親は柏崎、妻は高田の出身。病のため慶応大学を中退。歌作を始め、會津八一に傾倒し、後に師事する。
戦後、鎌倉アカデミア文学部教授を勤める。
昭和四二年、六五歳で死去。墓所は鎌倉瑞泉寺にあり、艸心忌が営まれる。
吉野秀雄全歌集（増補改定版）短歌研究社

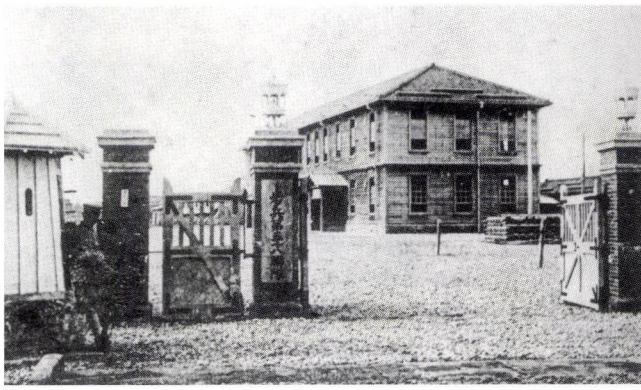
高田を愛した写真家

濱谷 浩

昭和十四年一月、「高田連隊スキー部隊の冬期演習をルポするため」高田を訪れた写真家濱谷浩は、高田の印象を次のように書いている。

高田の駅前旅館は雪の歩道の下に沈んで、帳場の電燈が赤茶けた鈍い灯をともしていた。本町通りは雪に埋まって、暗い雁木道を手探りするようにして町の中心の宿にはいった。ネオンサインが夜を支配する巷からくると、ここは夜が黒い雪で武装して、町も道も家も人間も制圧し、闇と沈黙が広がっていた。透明な寒気が逆に私の身体を熱くした。（略）

東京と雪国越後との環境の差に、私は好奇と驚きの眼を見張った。スキー部隊の取材を終わっても、そのまま帰る気になれず





濱谷浩が劇的な出会いをし、まちの人たちのサロンのようになっていた「東京パン」のある本町通。写真左のトラックの停まっている所が第四銀行。その右隣が濱谷の宿になった上原旅館（現在「君乃井酒造」の売店）、そして「東京パン」の看板が見え、「澤田蕎麦屋」には「外食食堂」の看板が揚げられている。その他のものから、戦後まもなくの写真と思われる。右上の写真は、取材に訪れたスキー部隊のある高田五十八連隊。

豪雪の町を右往左往した。宿の隣の、パン屋の片隅にある町でただ一軒きりの喫茶店にはいると、そこの若い主人が好奇の眼で話しかけてきた。大島保さんといって東京で製パンを勉強してきた好奇心旺盛な青年だった。私は高田に来た目的を話し、この雪深い町の人間の暮らしを撮影してみたいと話すと、それではぜひ紹介したい人がいるといって、市川信次さんを呼んでくれた。

市川さんは民俗学を研究されていて、今夜の夜行列車で上京し、数年間、渋沢敬三先生の主宰しているアチック・ミュウゼアムのメンバーとして研究生活をするとのこ

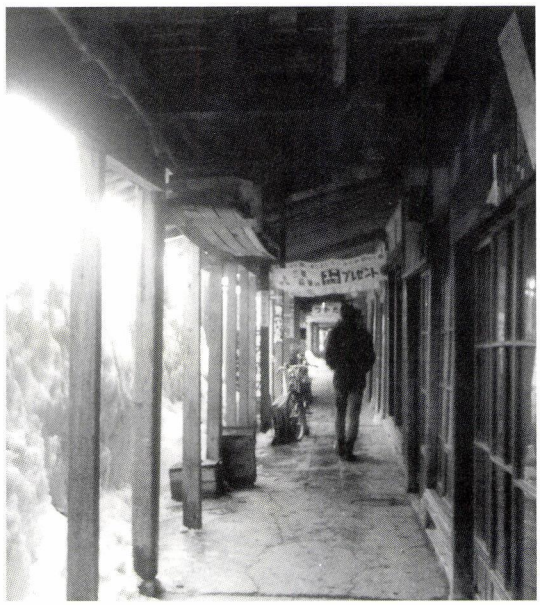
濱谷　浩

大正四年東京に生まれる。
写真集『雪国』『裏日本』『濱谷浩写真集成―地の貌・生の貌』『學藝諸家』などがある。マスター・オブ・フォトグラフィー賞、ハッセルブラッド基金国際写真賞を受賞。
昭和六四年死去。八四歳。
潜像残像―写真体験60年　筑摩叢書

市川信次
明治三五年、高田に生まれる。高田瞽女の調査報告で柳田國男に認められる。上京して渋沢敬三の主宰するアチック・ミューゼアムの研究員となる（この上京の日、濱谷と出会う）。瞽女を口承文芸として国の無形文化財の指定に尽力し、昭和五七年没する。

久昌寺文化サロン
太平洋戦争終戦前後に、高田寺町の久昌寺住職斉藤泰禅を中心に生まれたサロン。
疎開中の小田嶽夫、堀口大學、濱谷浩、地元の市川信次、木村秋雨や市内の文化人・知識人が集った。戦後、斎藤三郎が復員し窯を築き、會津八一などが足しげく訪れるようになった。（「上越の茶の湯」平丸誠著より）

雪に埋もれる本町通の往来を雁木が守る。下の写真は、濱谷の写真に「民俗」という視点を与えた桑取の小正月行事の「鳥追い」と「おおまら」。







とだった。東京で交わりを深めようと約束し、短い時間に多くのことを忙しげに話しあった。そのとき、高田の「瞽女」をぜひ撮っておいてくださいと紹介された。私は高田駅に行き、固い握手をし、夜汽車の窓に微笑みを浮かべる文学青年の面影を宿した市川さんを見送った。

濱谷の見た高田のまちには、昭和四十年代、急激な変貌のなかで捨て去ることになる日本の豊かな人の心と、まちの景観があった。

このときの市川信次との出会いが、以来十数年にわたって桑取の小正月を撮り続け、「桑取の民俗」を日本中に紹介するきっかけとなる。

すっかり高田の虜となった濱谷は、二〇年七月、撮影したフィルムや写真機材を寺町の善導寺に疎開させ、そのまま八月十五日を迎える。そして東京と高田の往復生活のなかで、「久昌寺文化サロン」と称される文化人と交わるうち、疎開中の堀口大學を仲人に、江戸千家茶道を教授する松本朝と結婚する。

二七年三月二七日、濱谷、三七歳の誕生日の前夜、

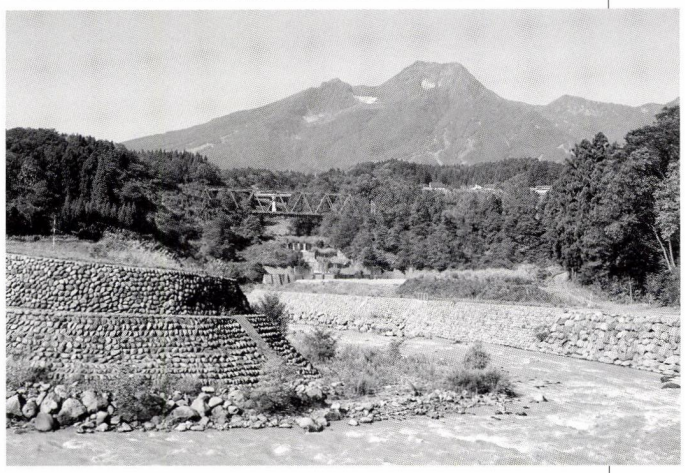
十三年前、見知らぬ雪のプラットホームに飄然と降りたったのと同じ駅のこの賑わいは感激だった。先に高田を去った小田さん、堀口先生を見送ったときに、別離の寂しさとともに取り残されたようなやるせなさを味わったのもこのプラットホームだった。

ふろ場を改造して暗室を提供してくれた勇み肌の消防士、池田のかっちゃん、恋の手紙の使者を果たしてくれた田村さんのお嬢さん（略）寿し勘の親父が折詰めを差し入れてくれ、売れっ子の菊枝姐さん「奥さんお達者でね」とお座敷着で駆けつけてくれた。学校の先生のほかにこんな盛大な見送りははじめてだといって駅長も挙手の礼で見送ってくれた。消え残る雪の中に高田の町の灯が、遠く小さくなっていった。

と、第二の故郷高田を後にした。

文人たちが足を止めた赤倉温泉

蔵々集落から望む秀峰妙高山



赤倉温泉は高田藩の直轄事業で文化十四年（一八一七）に開湯されたが、明治に至って藩の保護が失われ、新政府からは源泉の土地使用料を徴収されるなど、困窮に陥っていた。

この窮状の有様は、「此れほどの山水の勝を占めた温泉郷は無いのであるが、又此れほど寒酸の極みに至った町並を見たことが無い…」と、『煙霞療養』の旅で尾崎紅葉を長嘆息させている。今のような繁華な温泉街からは、とても想像もできない姿だったようだ（後に、この窮状から脱するため赤倉温泉分湯㈱に源泉を分けて売却し、妙高温泉が生れた）。しかし一方で、赤倉温泉からの眺望は「独り此の赤倉の曠闊は、恐らく湯治場としては日本一」と紅葉を感動させている。

このような高原の雄大な眺めに魅せられた多くの文人達が、赤倉温泉を訪れて旅館香嶽楼に投宿するようになった。香嶽楼は、赤倉温泉の復興に尽していた高田の上職人町（大町三）の旅館「三友舘」三舘（みたち）一郎次が、信越線敷設工事に携わった鹿島組社長鹿島岩蔵と図って開業したものである。

一郎次の養父三舘一郎は、一地方の旅館主に止まらず、東京京橋に書画骨董店「静香堂」を経営し、また上野公園内に、上野精養軒と名声を競った日本料理店「常盤華壇」（関東大震災で廃業）も経営していた。それは「区内（下谷）三大日本料理店の一として、市内（東京）屈指の大料理店」（「下谷大繁盛記」大正一三年刊）といわれていた。

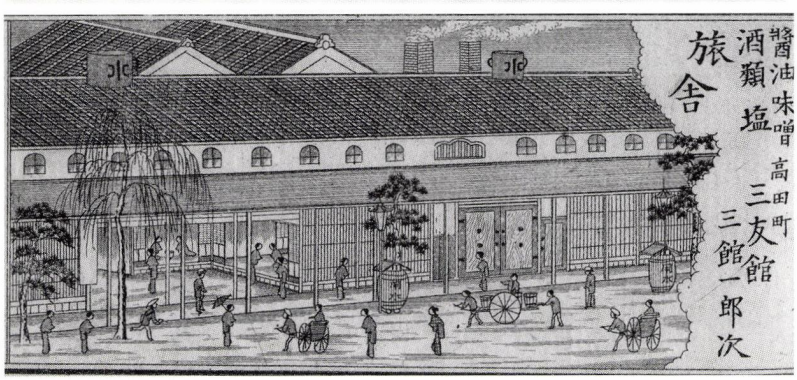
このような一郎の事業のなかで、一郎次にも多くの交友が生まれ、香嶽楼へ文人達の足を運ばせるようになったのではないだろうか。

先の尾崎紅葉は明治三二年、「金色夜叉」連載の過労を癒すため佐渡への旅を思い立ち、途次、香嶽楼に一泊している。その他、木下杢太郎、与謝野鉄幹・晶子、志賀直哉、吉野秀雄など止宿した文人は枚挙にいとまない。

その中でも忘れてならないのは、岡倉天心であろう。『The Book of Tea』（茶の本）の刊行が決まり、明治三九年、アメリカから帰国した天心は、父祖の地福井を訪れた帰り、高田に立ち寄り三友館に宿泊した。

このとき天心は、一郎次に進められて赤倉

天心が高田の宿にした三友館（北越商工便覧）

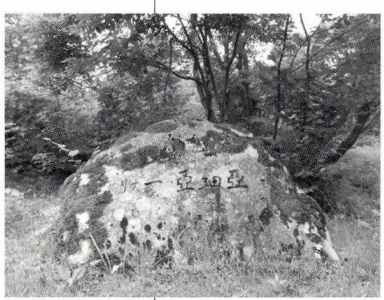




天心の赤倉山荘（今は所有者が変わっている）。下は天心堂、中には平櫛田中作の「岡倉天心像」が収められている。「亜細亜ハーナリ」は細川護立揮毫。







へ足を延ばして香嶽楼に宿泊し、高原の眺めを大そう気に入って直ちに山荘を建てることにし、翌年八月、高田城城門の厚板を浴槽にした温泉付の山荘が完成した。（現地で指揮を執った長男一雄は後に「高田新聞」の記者となる）

天心は、日本美術院を移そうと考えたほど、赤倉山荘をこよなく愛し、毎年避暑に訪れている。大正二年八月も山荘で静養していたが病状が悪化し、九月二日、五二年の生涯を閉じた

昭和三四年に天心堂が建てられ、命日には記念のお茶会が開かれている。

＊天心と三館一郎次については『高田摘誌』（村山和夫著）を引用した。

ゑしんの里記念館

まもなく親鸞越後配流八百年、上越にタイムリーな施設がオープンした。板倉区米増にある、親鸞の夫人恵信尼の墓所と伝えられる「恵信尼公顕彰碑」に隣接して建設された「ゑしんの里記念館」である。

恵信尼の資料やこれまで公開されなかった真宗資料が完全な複製で展示され、映像室では一流の学者のインタビューを交えて、恵信尼の生涯や親鸞・恵信尼の旧跡が紹介されている。

■入館無料／午前9時から午後9時／月曜休館／和室・多目的ホール(有料)／軽食堂

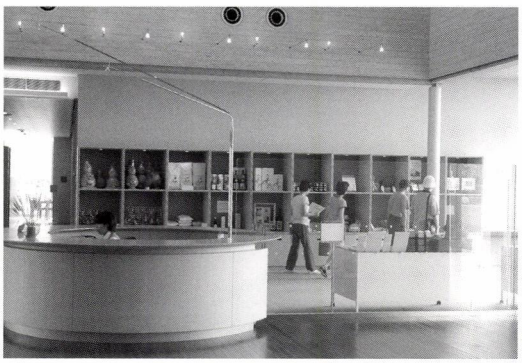
■(財)ゑしんの里観光公社　電話 0255－81－4541



夜間は9時まで開館しているので、池に張り出した「月見台」からは、折々の月を眺めることができる。



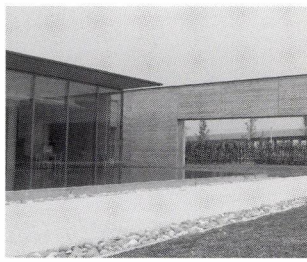




上　恵信尼公顕彰碑も合わせて整備され、見違えるようになった。

右上　恵信文書、親鸞書状、恵信尼絵伝が展示されるゑしんミュージアム。

右下　ミュージアムショップや物産販売コーナーもある。



明るい採光の食堂(左)、向こうに北陸新幹線の橋脚が見える。

ご案内

本誌第5号（平成14年3月）に〈「とんちん館」感傷旅行〉を投稿いただいた濱田研吾氏が、デビュー作『徳川夢声と出会った』(2000円・税別/晶文社)に続いて『脇役本』(2200円・税別/右文書院)を出版した。

前作は、著者が生まれる3年前に77歳で亡くなった徳川夢声のエピソードを古書や埋もれたラジオ番組から丹念に探し出し、その作業が「昭和」という時代に光を与えることになった。今回の『脇役本』は、〈ふるほんに読むバイプレイヤーたち〉とサブタイトルにあるように、舞台・映画の脇役達の本を「脇役本」と名付けて、58人の脇役人生を読み取る。著者自ら扉裏にかかげた、東山千栄子『新劇女優』の「20年か30年たったある日、街の古本屋さんの棚の一隅にただ一冊、ほこりを浴びているこの本を若い芝居好きの方が見付けて、昔こういう女優が居たのかと、写真をパラパラと繰って居られるところなど、何となく夢のように想像するばかりでございます。」という一文が、本書のすべてを語っている。一読をお勧めする。

カメラの眼

くびきのお宝 コッペルが引っぱる

六月十九日、頸城区の百間町周辺で「くびきのお宝のこす会」によって、瀧本邸の公開と旧頸城鉄道のコッペル機関車や収集家によって保管されていた客車や貨車が今回初展示された。地域の「お宝」発見して大切にしていこうという「のこす会」の活動は、地味ながら地に着いたものといえる。今後は上越市全体の「お宝」として大切にしたいものである。



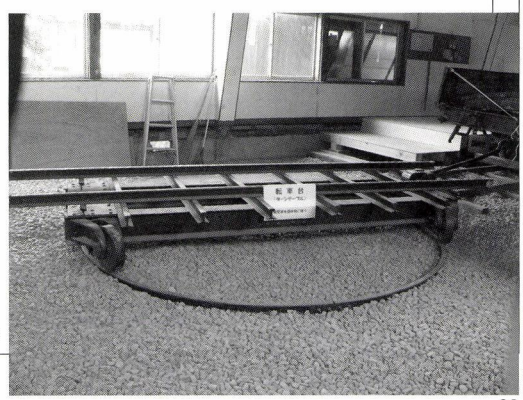
コッペルと里帰りした客車。



物産の販売もあり、家族連れでにぎわった。



全国から鉄道マニアが集まり、ファインダーを覗く姿が見られた。



すべては、このターンテーブルから始まった。



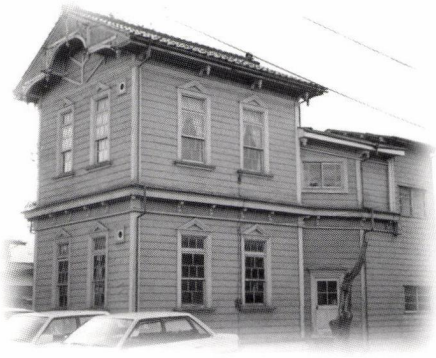


瀧本邸の表門「迎懐門」。江戸の武家屋敷を思わせる重厚な構え、左の写真は向かいにある山田家の門。会では「豪農通り」と名づけている。

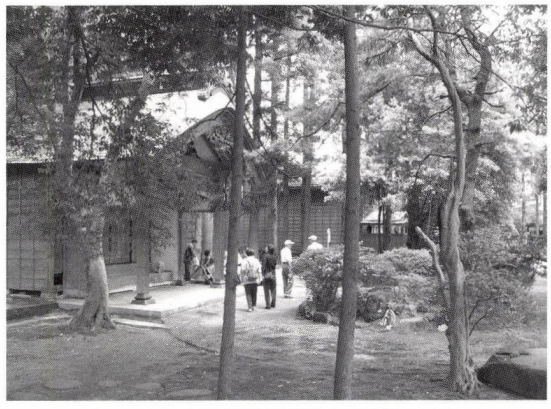




懐徳亭　この地域では屈指の格調高い建物である。知命堂病院初代院長瀬尾原始邸を移築したもので、おりあげ格天井と照明が良く調和し、座敷から眺める庭園もすばらしい。



瀬尾邸には、このような洋館も離れの応接室として建築されていた（現在、市によって解体保管）。市内には旧瀬尾邸の一部がもう一棟現存している。



母屋は、正面玄関だけが木々の間に見える。

ひろば

皇后さまにお酌をした昭和天皇の侍医
村山浩一

本山幸一

●坪野から東京へ

松之山町（現・十日町市）大字坪野は松之山役場から三キロメートルほど東に位置した高台にある。明治二二年（一八八九）の町村制の施行で、坪野村から布川村大字坪野に変わった。

この年の四月十四日、村山浩一はこの坪野で誕生した。

明治三二年三月、坪野尋常小学校を卒業、三五年三月に松之山郷高等小学校を修了し、父の直吉が東京浅草の凌雲閣に勤めていたため、浩一は上京して東京府立第一中学校へ進学した。

凌雲閣は、十二階または浅草のエッフェル塔と呼ばれ、明治二三年に開業した十二階建ての観光施設である。

浩一は明治四十年九月に第一高等学校へ進み、次いで四三年九月、東京帝国大学医科大学へ入学する。大正三年（一九一四）十二月に卒業したが、大学に残って翌年正月から入沢内科教室の助手を勤めることになった。

●恩師入沢達吉

大学の恩師入沢達吉は新潟県出身の人で、慶応元年（一八六五）正月、蒲原郡今町（現見附市）の医家に生まれた。父の没後、上京して東京帝国大学で医学を学ぶ。

卒業後、ドイツに留学して内科学・病理学・神経学などを学び、明治二七年（一八九四）に帰国、翌年十月に母校の助教授に就任し、三二年には医学博士、三四年に教授となる。三五年、入沢内科教室を設立し、四二年には日本内科学会の会頭となった。

入沢内科教室からは、多くの学者が全国の大学や研究所へ送り出され、各地で近代内科学を根づかせ、また近代的な内科医養成する教育に携わった。（『郷土の碩学』昭和五五・新潟日報事業社）

浩一の研究生活は、同郷の入沢教授に大きな影響を受けて進展した。

彼は大正八年（一九一九年）五月から十四年二月までの六年九カ月を大学の血清化学教室の研究生として過ごし、十三年十月には医学博士となった。この間、大正十一年正月まで北村胃腸病院の副院長も兼任している。

大正十四年正月、恩師入沢達吉が大学を辞して、宮内省の侍医頭と侍医を兼務すると、浩一も二月には、内科学を学ぶためドイツへ留学することとなった。

この留学では、ドイツ・フランス・イギリスで出版された豪華な画集を収集していて、浩一が西洋絵画に深い興味を示していた一面を知ることができる。



村山浩一（大棟山美術博物館蔵）

注1　凌雲閣
明治二三年、東京浅草公園に建てられた地上五〇㍍の展望施設。日本初のエレベーターが設置された。大正十二年九月一日の関東大震災で崩壊。

注2　入沢達吉
洋方医入沢恭平の長男として生まれる。父方母方も幕末から明治にかけて、多くの洋方医を数多く出している。叔父の池田謙斎は、長崎で西洋医学を修めた最初のドイツ留学生、医学博士第一号。達吉は父の死後、この叔父を頼って上京し医学を学んだ。（「郷土の碩学」新潟日報事業社）

注3　三正会
大正三年東京大学医学部卒業生同窓会

昭和天皇の侍医生活

浩一は、大正十五年（一九二六）五月に帰国すると、十月に宮内省の侍医となり、以降、昭和天皇のために尽くすことになる。

彼は、そのときのことをこう記している。

大正十五年秋、入沢先生から宮内省に入れと命ぜられた。しかし、自分には全く不適格だと思ったので相当に抵抗したが、けっきょく先生に説得されてしまった。

私は、相当に困惑を覚えた。まず、御所の広大さと壮麗さにたじろいだ。また、側近奉仕の人々は、公家や大名が多数を占めていた。そして、ほとんどが帝国大学を出た俊秀だった。その人々と行動することに、一種の違和感を覚えた。（三正会『半世紀』〈侍医生活三十有七年〉より抜粋）

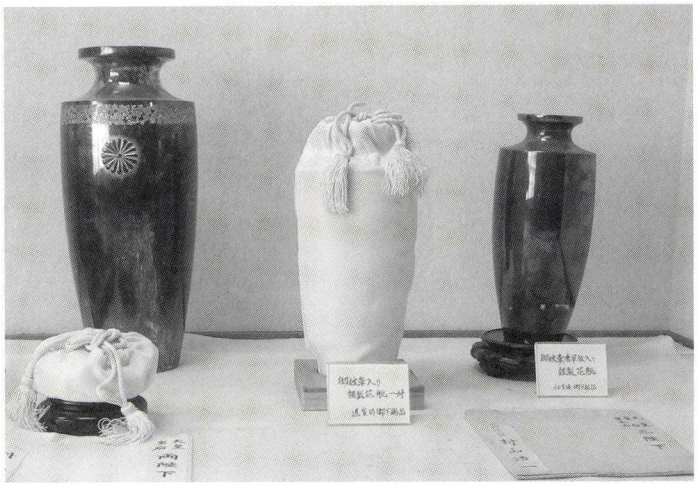
このようにして、入沢の強力な推薦によって、浩一は侍医に就任した。

侍医は数人が交替で勤務し、天皇のご健康をお守りする。浩一は侍医生活を振り返って、天皇のご一家は皆様がご健康であられたので、苦労することがなかったし、天皇のお人柄の温かさにひかれながら、のびやかに過ごすことができた。と述懐している。

天皇のご旅行や各地への行事に付き添うことも、侍医としての職務の一つであった。

なかでも、昭和二十年（一九四五）九月二十日、天皇がマッカーサー元帥を訪問された







大棟山美術博物館と下賜の品々

旧村山邸（村山浩一家ではない）に開設されている大棟山美術博物館は、浩一や作家坂口安吾の遺品、村山家の豪華な調度品が展示されている。

ときのことは、忘れることができなかった。

二七日朝、当直の浩一に、

書記官がそそくさと侍医室へ入って来てモーニング・ワイシャツ・シルクハットはあるかと聞いた。今日十時に、陛下がマッカーサー元帥を御訪問になるんだ。すぐ支度しろと言う。

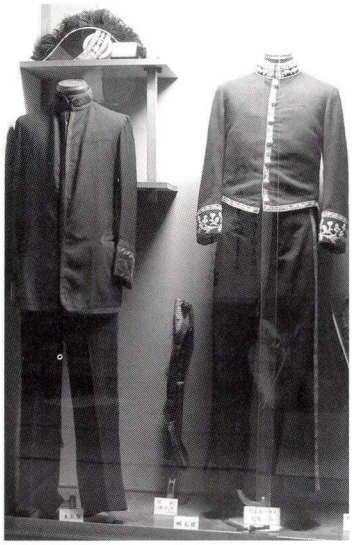
大急ぎで服装を整え、大臣・侍従長・通訳など六人が付き添った。

驚いた事には、今日の行幸の御道筋は、全く何の警戒もしていない。自動車がさかんに走る。自転車が走る。荷馬車が走る。其の中に鹵簿（行幸の列）は走る。道路には沢山の人が歩いて居るが、殆ど御召車に気づかない。

米国大使館での会談は儀礼的訪問で、五、六分だろうという予想ははずれて、一時間を過ぎていく。控え室で、米国将官の「陛下は大学教授のような方ですね。意外でした」という感想を聞きながら待っていると、将官がはじかれるように起立し、

陛下が元帥と、室の前に御出でになったのだ。マッカーサーはニコニコしている。陛下は供奉員を一、一御紹介になる。握手する。大きな団扇のような手だ。

マッカーサーは、陛下を頗る鄭重の態度で玄関まで御送りする。陛下は淡々たる御様子で今朝といささかの御変りもあらせられない。（三正会『山椒のかおり』へ日記帳の断片―陛下の第一回マッカーサー御訪





明治天皇愛用の銀製燭台（大棟山美術博物館所蔵）
浩一着用の大礼服（大棟山美術博物館所蔵）

問―〉から要約）

と書いている。

昭和三四年（一九五九）四月、浩一は侍医長と宮内庁病院長を兼務することになり、四一年二月に退職するまでの七年間は、彼にとって最も責任の重い期間となった。

●豪放磊落で飾らぬ人柄

宮中では、侍従や女官、侍医などが両陛下と一緒に食事をいただくことがときどきあり、当然お酒（宮中では酒を錫の容器に入れるので酒も〈おすず〉という）も出る。

この時期に同じく侍医を務めた杉村昌雄は、皇后さまに酒をお勧めするという「豪放で飾らぬ村山さん」のエピソードを『天皇さまお脈拝見』（新潮社）のなかで紹介している。

ある宴席で浩一は、錫の酒器を手に持って皇后さまの席に近づき、「皇后さま、どうぞ」と、盃を空にするように促がしている。そのうち、

「奥さん、どうぞ、どうぞ」

奥さんとは誰のこと？　むろん、皇后さまのことだ。

笑いながら「もう結構」とお断りになる皇后さまに対し、

「ま、そうおっしゃらずに、奥さん、どうぞ、どうぞ」といってるのである。

断りきれぬと、おすずをお受けになる皇后さまに、

「奥さん、奥さん、こぼれますよ、奥さん」

という念の入れように、一時はどうなるかと思ったが、そのあと、一同大笑いになったという。

また、「痛い」というお言葉を口にされたことのない陛下が、浩一の治療で、

陛下は思わず、

「痛い」と飛びあがられたそうである。

すかさず、村山さん、それにこたえて、

「痛いとは、そのことです」

と応じた「豪傑肌」の人柄をも紹介している。

浩一は、退官に際して、

落ち葉しく吹き上げの御園に山茶花は
霜を凌ぎてあでやかに咲く

と詠み、昭和四五年十月二一日、八一歳の生涯を閉じた。

浩一が松之山町名誉町民に推挙された縁で、多くの下賜品や宴の品々が、生地松之山の大棟山美術博物館の一室に展示されている。なかでも、銀の燭台は明治天皇が宮中の正餐の席で愛用されたものという。

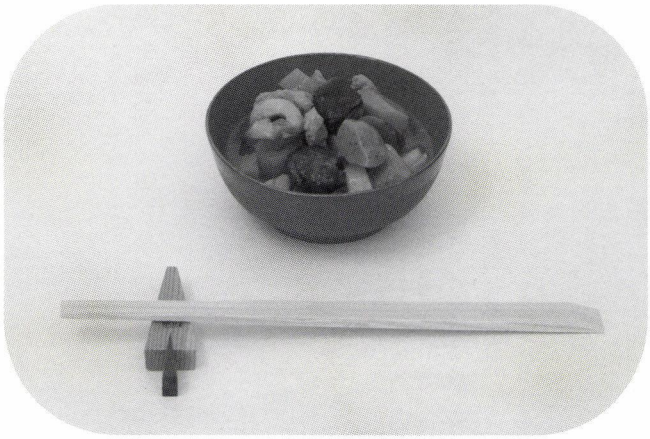
＊本稿は、本山幸一氏が他誌に執筆したものを筆者の了解を得て、編集部において再構成して転載したものである。

■本山幸一
昭和十一年　松之山町浦田生
県内中学校教員を歴任
平成十七年三月まで長岡市立中央図書館嘱託
南魚沼市郷土史編集委員会近世史部会長

■協力（転載に当たって）
村山俊介　十日町市松之山
（財）大棟山美術博物館　十日町市松之山
久保田好郎　上越市

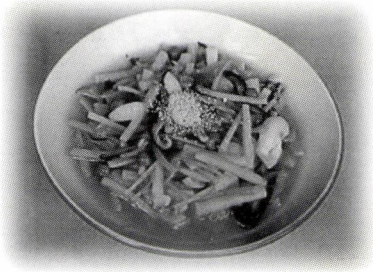
くびきの郷土食

のっぺ汁





若宮おん祭の行列



普茶料理の雲片
本来は野菜料理の屑を使った

新潟県の郷土食と言われながら、県内の地域によって、これほど出来上がりの違う食べ物も珍しいであろう。

おおざっぱに、仕上げに片栗粉でとろみを付ける上越、片栗粉を入れず、イクラを乗せる下越という分け方ができるであろう。また行事食であり、仏事にしか供さないところ、歳取りや祝い事にも供す地域とがある。（慶事と仏事では材料の切り方が違うこともある）

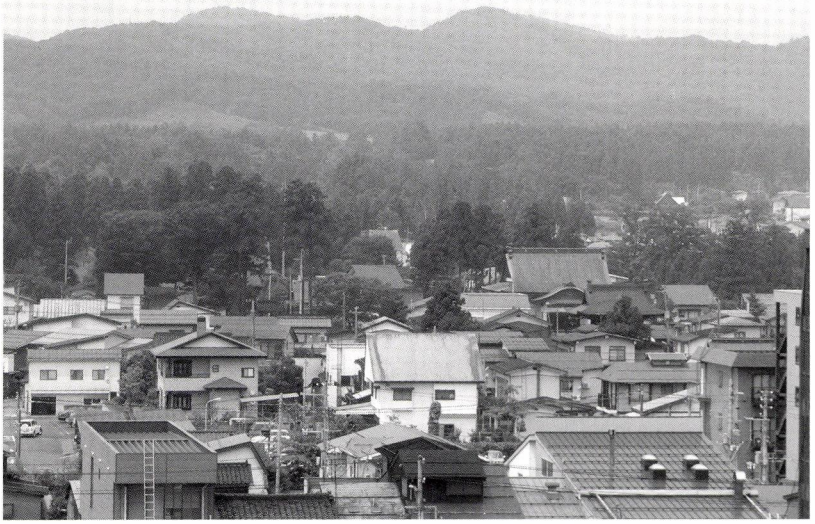
〈のっぺ〉は「のっぺい」あるいは「のっぺい汁」などと呼ばれ、意外にも全国的に分布しているので、純粋に郷土食と言えるかどうか疑問である。しかし、どの土地でも、その常として〈独特の〉とうたっているが面白い。語源は、「納平」たいらに収めるというめでたい意味だとか、「濃平」濃い目に味付けされた平椀のことだと、諸説ある。

興味深いのは、のっぺの原型として、ほとんど同じ具材を炒めて片栗粉で仕上げる普茶料理の「雲片」を澄まし汁仕立てにしたという説である。また、十二月十五～十七日に行われる奈良春日大社若宮神社の「おん祭」（国重要無形民俗文化財）の初日十五日に行われる「大宿所詣（おおしゅくしょもうで）」に振舞われる「のっぺ」が日本最古といわれている。三センチ角に刻んだ厚揚げと、乱切り野菜のすまし汁を片栗粉で仕上げる。

〈**作り方**〉里芋・人参・コンニャク・ちくわ・干し椎茸を適当な大きさに切る、だし汁・酒・醤油で煮込む。

大悟法上教大教授の報告（地域から考える総合学習）によれば、旧上越市の諏訪・金谷・高田・八千浦地区の代表から同時にのっぺを作ってもらったところ、右の材料のほか高田地区以外は油揚げが入り、高田は代わりにとりも肉とごぼうが入る。金谷と八千浦はぎんなん、また八千浦のみジャガイモが入り、竹の子、冬瓜、れんこん、車麸、しめじを追加することもある。

水溶き片栗粉で仕上げるのは共通。



住んでいる街を知る喜び

「直江の津」一読者として

小川善司

今年の「直江の津」春号を読んでいて、思わず引き込まれた特集があった。

上越市教育委員会学芸員・中西聡さんの城下町高田に関するナゾ解きのお話である。

普段なにげなく暮らしている自分の街に、こんなすばらしいロマンがあるとは、〈目からうろこ〉のような驚きであった。

あれから二ヶ月というもの、会う人ごとに、機会があればこの話をしているので、家内までもが「話を聞くまで主人の前を通れないのよ」という始末である。

そして高田城と寺町に連なる六六の寺院との関連のナゾ解きの元になった「浄瑠璃寺」は、次回京都旅行の際の訪問第一候補となってしまった。

忠輝の高田城下建設の目的が「平和」への祈りだったという事実を、わかりやすく解いていく春号の特集は、この高田に住む一住人としての誇りに満ちた興奮となって、自分を語部（かたりべ）にかえてしまったようだ。

春陽館書店で売り切れにならないうちにと買いあさり、人にプレゼントした若草色の「直江の津」もすでに数十冊を超えている。

高田城から真西（西方浄土）を拝むラインが、本町七丁目の交差点（加賀街道の始発点）から、本町通りの突き当たりにある平井呉服店までぴったり半里（二km）、その本町通を一kmずつに二分する大和デパートと小熊写真館の間の二ノ辻を通り、徳川家の宗旨である浄土宗の善導寺につきあたることを、高田の人でさえ知らない人も多い。

ましてや「占い」と「浄土」というキーワードから自分の町が生まれたことを知ったら、どんな顔をするのだろう。



この祈りのラインを見るには、天気の良い日に雁木通りプラザの屋上に上がり、北側から町を見下ろしてみるのが良いだろう。屋上から見ると、眼下に広がる高田の町並みは実にうつくしい。

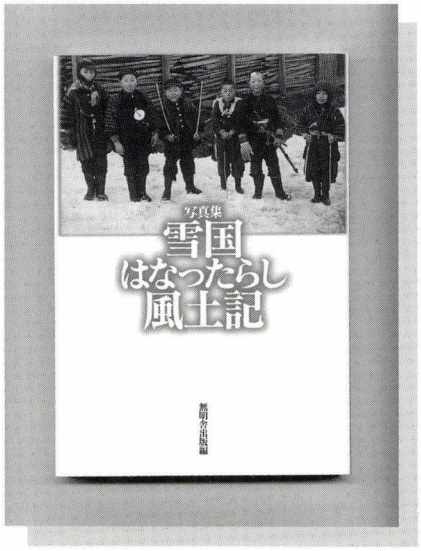
そこには高田の町家や雁木の連なりが見える。今でも総延長十六kmを誇る高田の雁木は忠輝の築城以来、高田人々の人情と助け合いの精神を育んできた。

雁木の活用と保存に補助金が出たり、雁木部分の固定資産税が免除されたりする制度が出来て、この申請をする人も増えている。

高田城下町の成立のころから続くこの地域コミュニティをいつまでも守りながら、雪が育んできた高田の歴史と文化をこれからも大切にしていきたいものである。

（本町七丁目・きものの小川　店主）

■読書びと



写真集 雪国はなったらし風土記

無明舎出版刊
一六〇〇円

八月二十二日が命日の我が向田邦子、演出家久世光彦（くぜてるひこ）は没後も彼女の遺した昭和の景色と言葉に拘り続ける。正月には昭和のはじめを舞台に向田原作のドラマをつくり、八月は敗戦前夜の女家族を描いた。形を変えて青木玉の『小石川の家』を撮ってもその心延えは同じである。

向田の衣鉢を継ぎ五十歳を過ぎてものを書きはじめた久世。〈フォトエッセイ〉と称して山本夏彦との共著『昭和恋々―あのころ、こんな暮らしがあった』（現在は文春文庫）で、失われゆく文物と「そこに生きてきた人々の勁い気持ちと、貧しいけれど力に溢れた眼の色」を綴る。

饒舌で上品、柔らかで切ない文と、モノクロームの写真が忘れていたものを思い出させる。

「夏になると、天秤棒の前と後ろに盥をぶら下げて、器用に平衡をとりながら金魚売りが通る。いずれ死ぬものを売り歩くのに、どうしてあんなにのんびりした声なのだろうと、私は、不思議に思いながら、二階の窓から、盥の水がキラキラ揺れながら遠ざかっていくのを見ていた。」

記憶の世界に遥蕩ながら、『昭和恋々』の抒情に戦後世代が何を対峙できるか心騒いだ。

一九八八年、「時代背景や感情移入の激しい文章など使わずに、写真とそのキャプションだけで読ませるシンプルな構成にする」という編集方針の下、東北秋田の小さな版元から『雪国はなったらし風土記』が上梓された。

装を改め今も版を重ねるこのまことに楽しい写真集を世に送ったのは、一九四九年生まれの舎主安倍甲（あべはじめ）が秋田大学教育学部を中退後、古書店や市民運動の活動を経て七六年にたちあげた「無明舎出版」である。そして創業以来の仲間の男女六人のスタッフは、団塊世代の強かさで〈ローカル&ロートル〉を標榜しながら、三十年間で八百点の本を紡ぎ出している。

最近では、寄港地百八十二箇所、二万キロを踏査して労作『北前船　寄港地と交易の物語』を完成させた。その一方、三百枚の写真とコピーで描く抱腹絶倒の路上観察ガイド『Muridas・ムリダス』や、『宮武外骨絵葉書コレクション』等、《カメラの眼》子も垂涎間違いなしの本を手掛ける、要注目の出版社なのだ。

『雪国はなったらし風土記』は、地方出版の常として県下十余の地域の〈思い出のアルバム〉を出版した余禄に、収集した無名の撮り手の写真三万コマから、一九五〇年代の子供達のワルガキ遊びや小さな働き手としての暮らしをモチーフに二百二十葉を選び見事に構成している。

「一枚の写真に、その頃子供だった自分の姿を重ね合わせ、ものおもいにふけったりニヤついたり、編集作業は仕事というよりも夢幻境に遊ぶ至福の時間でした。」と前書きでスタッフが述懐するように、残し伝えるべきものと出合えた出版屋の悦びが、読み手の胸を打つ。

稲刈りの終わった田圃での野球、雪の路地でのチャンバラ、子守や水汲みに追われながら暗くなるまで駆け回った子供たちの眼差し。土門拳『腕白小僧がいた』や荒木経惟『さっちん』など、同時代の下町や団地の少年少女の写真群とは確かに異なる時空の世界が広がる。

そして、ヴァイオリンを弾く白衣の傷痍軍人、紙芝居、街頭録音、木造校舎の高窓の硝子拭、泥道、高校生の朴歯の足駄……子供を取り巻く背景はすっかり消えてしまった。

無明舎出版は『大太鼓の里』（宮野明義・八九年）、『角館のお祭り』（藤木春悦・九〇年）など写真で秋田の祭りを記録した仕事を重ねている。〈上越まつり〉の無惨な在り様が身に沁みるにつけ、からくも『アルバム直江津』を残した有志諸兄に、この海辺の町で昭和の時代を多方面から記録し伝える息の長い仕事を、今こそ共感、応援して下さるよう望みたい。

（紳）

幻魚

ゲンギョは、網にかかっても捨てられていた「下魚（げぎょ）」が訛ったものだという説がある。ズワイガニや甘エビの網にかかってくると、かつては捨てていたということである。

分類としてはスズキ目・ゲンゲ亜目・ゲンゲ科・ノロゲンゲ属・ノロゲンゲということだ。当然ちゃんとした学名も付いている。

四百メートル前後の深海魚で、日本海からオホーツク海まで分布し、体長は二〜三〇センチくらい、全身がゼラチン質に覆われていて、ヒレが発達していない。これらは深海魚の特徴ということだ。

本欄の常として名称の違いと分布を調べてみると、県内では中越はゲンゲ・下越はジョンジョロ、佐渡ではミズブタと呼ばれているようだ。もうひとつ、福井県を例に挙げると、三国町はゲンゲ、越前町ではミズウオ、今立町はミズベコと呼んでいる。

その他、日本海沿岸各地で獲れるので、グビ・トギ・ブルなどという名称もある。

あの体を覆うゼラチン質の見た目は、気持ちのいいものではない。筆者は食わず嫌いなのだが、ぬるぬるした見た目は、汁でも鍋でも、ちょっと食べる気がしない。

それが、なぜかブームになって、テレビの旅番組などでよく登場するようになり、汁物を「おいしい、おいしい」と言いながら食べているタレントを見るにつけ、―ほんとかなぁー、無理やりじゃないのか？―と思ってしまう。

このゲンギョブーム以来かどうか、どの土地でも、昔は下魚として捨てたと言いながら、実際は「郷土料理」として紹介し始めている。そして、あっさりとして低カロリー、コラーゲンたっぷりのゼラチン質がダイエット食として注目されているという話もある。（富山魚連は、大学・製薬会社と協同で、ゲンギョを丸ごと凍結乾燥粉末化した「ゲンゲＦＤ&コエンザイムＱ10プラス」を開発）

とすると、もしかしたら「捨てていた」というのは真っ赤なウソで、漁師の間では、本当は美味しく食べていて、外には隠していたのではないのか。それが、容赦ないマスメディアに暴かれてしまって……。それでは、おいしく食べる方法とは？　そのひとつが干物。

北陸から西が、ほとんど汁物であるのに対して、冬から早春の西頸城方面に行くと、あちこちの軒先にゲンギョが吊るされているのを見ることができる。そして独特の匂いが漂ってくる。

保存が良くなったのか年中、幻の地魚として置く居酒屋もある。旅行者も「幻の魚」と言って注文するという。

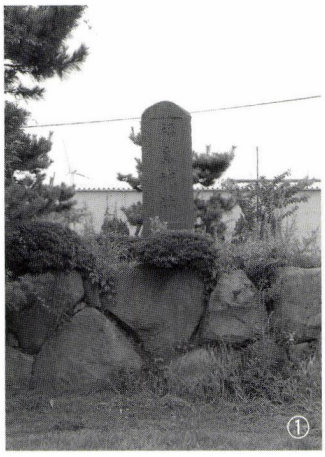
さて、このゲンギョの干物を〈幻の魚〉と書いて「幻魚（げんぎょ）」と読ませたのは名立区の人である。（商標登録しておけばよかったのに）

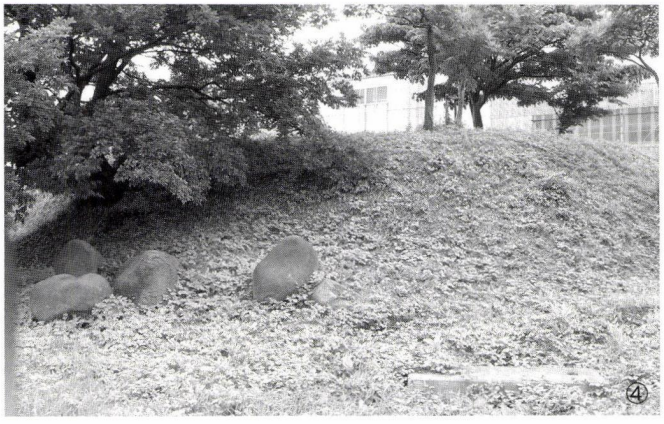
このネーミングこそが、日本海の産地の中でも、新潟県西頸城の特産として、全国的なブームを巻き起こし、幻から明るみに押し出した張本人である。そのせいでもないだろうが、最近は水揚げ量が減少し、本当の〈幻〉になりかねないということだ。

（深）

歴史の風景


②


①


④


③

①昭和54年、当時のステンレス直江津製造所によって石垣が再現され、古城小創立20周年に建立された「福島城址」の碑を設置した。
②昭和40年頃の福島城跡。右下隅は保倉川、中央の帯が南堀で幅は50mを超える。その内側が古城小学校、背後にステンレス工場が広がる。
③昭和44年の大手門跡発掘。多くの学生が参加した。大きな花崗岩の切石は門の角にあたる。
④東南隅櫓跡。福島城跡で唯一目にできる遺構。調査の結果、高さ5m・すそ幅東西33m・南北20mであることがわかった。住友金属直江津の南門脇にある。今でも石垣に使われた石が残る。住友金属では、調査担当者と計って遺構保存のため工場の位置を変更している。かつては説明の看板も立てられていた。

福島城址

市立古城小学校と住友金属直江津の敷地は、上杉景勝に替わって越後を支配した堀氏によって築かれた福島城本丸跡である。二百メートル四方の本丸と、東西三キロ・南北二キロの広大な外郭を誇る福島城は慶長十九年（一六一四）、わずか七年で廃城の運命となる。

廃城の石垣は、道標や鐘楼の基壇に転用されたが、工場地帯の出現や宅地化が始まる明治半ばころまで残っており、石垣の上を歩いたとか、曲馬団の踊り子が石垣の隙間へ逃げ込んだという話も伝えられている。

昭和四二年、御館跡発掘の成果を受けて、三年計画で福島城跡の発掘が行われることになった。再び根津美術館学芸員奥田直榮（なおしげ）氏の指導で、工場から提供された重機・ベルトコンベアを導入し、地元中高生・県内外の大学生・頸城村青年団・ステンレス工場有志・保存会によって、三年間で延べ二千人に近い人達が発掘に携わった。四二年の文化の日には「福島城発掘資料展」が開催され、発掘状況のスライド紹介、講演会が開かれた。

このように発掘の成果を専門家の占有とすることなく、地域の宝物として公開する姿勢は、当時としては先進的なことであった。また発掘に先立って港町町内会を中心に福島城保存会が結成され、日本ステンレス㈱、日曹製鋼㈱（いずれも当時）や信越化学㈱の各工場、商工会議所、直江津市教育委員会・文化財調査委員による事前の会議が持たれている。

このような考えは、工場内に自主的に遺構を保存整備する姿勢に今も引き継がれている。

参考『越後福島城史話』奥田氏は福島城主堀氏の末裔　出土品は埋蔵文化財センター／成果は「上越市史叢書8」に詳しい。

発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越（かみえちご）後全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

■編集室から■

本年春号、中西聰氏の〈「高田」のまちにこめられた祈り〉が大変な好評をいただき、ありがたい感想をいただいた。因みに、小川さんは、雁木に関する補助金制度の周知と活用を訴えて奔走中である。

カメラの眼は、くびきの活動を少しだけ覗いただけではあるが、見学するものに準備の大変さを思わせない力量を感じた。同じころ柿崎では「お引き上げ」が行われていて、小学校から高校生まで半日授業になり、こちらの質問にも「休みで当然でしょ」という顔つきで子どもたちは楽しんでいる。

このような地域行事の豊かさは、広域化した広報紙の行事一覧からは伝わってこない。

第5巻4号　12月1日　発行予定

年間定期購読（4冊1920円・送料込み）を受け付けております。ご希望の方は編集部までご連絡ください。

季刊「直江の津」秋号
第五巻三号　通巻十九号
発行日／平成十七年九月一日
発行所／直江津経済文化研究会
上越市中央二－一－八
上越信栄社内
☎〇二五（五四五）〇二一〇
発行者／上越なおえつ信金倶楽部
発行責任者／中川虎三
編集協力／(有)北越出版
責任者　佐藤和夫

内容・投稿などの問合せ先
北越出版
〒九四二－〇〇八二
上越市国府三－九－五
FAX〇二五（五四三）二〇二五
E-MAIL hokuetu@seagreen.ocn.ne.jp

季刊

直江の津

発行／平成十七年九月一日■発行者／上越なおえつ信金倶楽部■発行所／直江津経済文化研究会■制作協力／(有)北越出版■表紙構成／小谷充

頒布価格／三〇〇円(送料一八〇円)